

日本株にも二極化相場の兆し

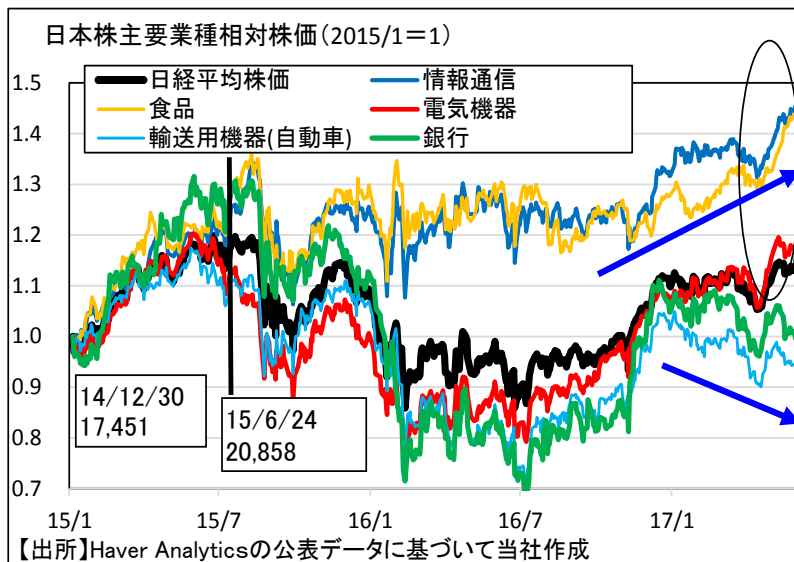
2017年6月8日

りそな銀行 アセットマネジメント部
チーフ・マーケット・ストラテジスト 黒瀬浩一

二極化相場は株式市場の歴史に何度も現出した。いつもパターンは同じである。画期的な技術革新が人々の欲望と夢を喚起し、株式市場で極端に高いバリュエーションがついて株価が高騰する。しかし、画期的な技術革新といえども極端に高いバリュエーションと長期的には整合的ではない。新規参入による競争の激化や独禁法の適用で企業収益が他の業種と同等の平凡な水準に低下すれば、バリュエーション調整でPERも株価も平凡な水準に収束する。これが典型的なバブル崩壊で二極化相場の終焉だ。経済学的には、画期的な技術革新の恩恵が生産者余剰から消費者余剰に転化して広く世間に行き渡る過程だ。

近年の実例では2000年頃のITバブル崩壊がある。ただ、業種ごとに見ればもっと多くの事例がある。日本の電気機器セクターでは、1970年頃のテレビ相場、1980頃のVTR相場、2000頃のPC相場などだ。全ての例で夢の商品の価格は大きく下落したが、企業収益は平凡化する一方、消費者は恩恵を享受した。

6月に入り久々に日経平均株価が一時的ながら二極化しつつ2万円の壁を突破した。原動力は下図の



ように情報通信、食品、電気機器セクターだ。中でも情報通信と電気機器は、米国のナスダックが2000年の最高値を超えた2015年から2年ほど遅れたが、日本株を牽引するセクターとして大いに貢献した。相場テーマとしては、デジタル、AI、IoT、ロボット、ARなどだ。尚、米国ナスダックに多いプラットフォームには、極端に収益性の高いAPIも加味される。

近年、情報通信や電気機器セクターにはテーマ株として有望視される銘柄が多数あったが、やっとここに来て世界と同様に全体相場を牽引する力を持ったと評価して良いだろう。ここ

から先は、中小型株が多い情報通信セクターやニッチな部品に強い電気機器セクターの特性に留意しつつ、今回の二極化相場が持つ世界的な広がりや各国のセキュリティー対策や独禁法の運用など規制強化の動きをにらみながら、二極化相場の趨勢を見守るのが得策だと考えられる。

以上

- ・本資料は、お客様への情報提供を目的としたものであり、特定のお取引の勧誘を目的としたものではありません。
- ・本資料は、作成時点において信頼できるとされる各種データ等に基づいて作成されていますが、弊社はその正確性または完全性を保証するものではありません。
- ・また、本資料に記載された情報、意見および予想等は、弊社が本資料を作成した時点の判断を反映しており、今後の金融情勢、社会情勢等の変化により、予告なしに内容が変更されることがありますのであらかじめご了承ください。
- ・本資料に関わる一切の権利はりそな銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを固くお断りします。